

音楽科

音楽科部 稲森 稚明 藤井 有美
研究協力者 中里 南子

I 音楽科における「社会に変革を起こす子ども」について

- 自らのイメージや音楽表現を基に、音や音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを伝え、
- ・他者の音楽表現の工夫を高められる子ども（表現領域）
 - ・他者の曲全体の聴き方を深められる子ども（鑑賞領域）

本校の学校教育目標「つよく ただしく かしこく」を具現化した児童を育成するためには、各教科等の学習指導要領を基に、本校の児童の実態を踏まえて捉えた資質・能力を育むことが必要である。音楽科の問題解決的な学習では、「聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力」を育むことを目指す。この資質・能力と、音楽科の問題解決的な学習の過程の具体は、以下のとおりである。

聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力

(1) 知識及び技能

曲想と音楽の構造との関わりについての理解
表したい音楽表現をするために必要な技能

(2) 思考力、判断力、表現力等

聴き取ったことと感じ取ったことを基に思いや意図をもち、音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりする力

(3) 学びに向かう力、人間性等

音楽を愛好し、感性豊かに音楽に親しむ態度

<「聴き取ったことと感じ取ったことを結び付け、音や音楽と豊かに関わる資質・能力」についての三つの柱>

過程	表現領域（題材）の学習活動	
つかむ	聴いたり演奏したりして、聴き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う	☒
	題材のおおまかな見通しをもち、題材のめあてをつかむ	
追求する	①音楽表現に対する思いや意図をもち、思いや意図に合った音楽表現の工夫に対する課題を設定する	- - ☒ - -
	②工夫して音楽表現をする	
	↓ 繰り返す ↑	
	③音楽表現に対する思いや意図を膨らませる	
まとめ	④思いや意図に合った音楽表現の工夫に対する課題の答えを出す	- -
	①～④を繰り返す	
	考えた音楽表現の工夫を生かして表現する	
	題材のめあてに対する振り返りをする	

<本校音楽科の表現領域における問題解決的な学習の過程>

音楽科表現領域における問題解決的な学習において、児童は音や音楽と出会い、曲想から曲のイメージを感じ取ったり、そのイメージと結び付く音楽を形づくっている要素を聞き取ったりしながら「このように表現したい」という思いや意図をもつ。自分の思いや意図に合った音楽表現をするために、音楽表現の工夫に対する課題をもつ。課題を追求する中で、自他の音楽表現から聞き取ったことと聞き取ったことを友達と伝え合うことで、新たな思いや意図をもったり、更新したりし、思いや意図を膨らませていく。思いや意図を膨らませることと、音楽表現の工夫を試行することとを繰り返しながら、自分の思いや意図に合った音楽表現の工夫を見つけていく。その際、自他の音楽表現から聞き取ったことや聞き取ったことを友達に伝える児童の姿が見られた。それらを伝えられた児童は、目指す音楽表現の達成に向けて必要なことを自覚し、思いや意図を膨らませながら、互いの音楽表現を高めることができていた。そこで、音楽部では、音楽科表現領域における「社会に変革を起こす子ども」を「自らのイメージや音楽表現を基に、音や音楽から聞き取ったことと聞き取ったことを伝え、他者の音楽表現の工夫を高められる子ども」と具体化した。

なお、本校では、たくさんの音楽に触れ、音や音楽の捉えを広げ、より豊かに音や音楽と関われるように、前頁の図中「」に、鑑賞領域を位置付け、題材を構成している。題材特有の「よりどころとなる音楽を形づくっている要素」を要として、表現領域と鑑賞領域を適宜組み合わせている。鑑賞領域の一単位時間における学習の過程は次のとおりである。

過程	鑑賞領域（単位時間）の学習活動
導入	曲全体を聴いて、聞き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う
	曲全体の聴き方を深めるための、曲想と音楽の構造との関わりについての課題をつかむ
展開	曲を聴く
	↓ 繰り返す ↑
終末	再度、曲全体を聴いて、課題の答えをまとめる
	聞き取ったり感じ取ったりしたことを伝え合う

＜本校音楽科の鑑賞領域における問題解決的な学習の過程＞

音楽科鑑賞領域における問題解決的な学習において、児童は曲と出会い、特徴を聞き取ったり曲想を感じ取ったりする。自分と友達の聞き取ったことと聞き取ったこととを比較して、共通点や相違点を知り、曲について知りたいという思いをもつ。そして、曲全体のよさを見つけ、聴き方を深めるための、曲想と音楽の構造との関わりについての課題をもつ。友達と聞き取ったことと聞き取ったことを伝え合う中で、新たな曲想や音楽を形づくっている要素、それらの関わりや表れ方について気付く。そして、新たな視点から繰り返し曲を聴くことによって、自分なりの曲のよさを見だし、曲全体を味わって聴く。その際に、曲から曲想やイメージを感じ取ったり、その要因となる音楽を形づくっている要素を聞き取ったりしたことを友達に伝えた児童がいた。伝えられた児童は、新たな曲のよさを見だし、聴き方を深めることにつながっていた。そこで、音楽部では、音楽科鑑賞領域における「社会に変革を起こす子ども」を「自らのイメージを基に、音や音楽から聞き取ったことと聞き取ったことを伝え、他者の曲全体の聴き方を深められる子ども」と具体化した。

また、本研究で捉えた「社会に変革を起こす子ども」の姿は資質・能力の三つの柱を相互に関係し合うことを活性化している姿であり、音楽科の問題解決的な学習の中で、上記のような姿が現れることを積み重ねることにより、本校音楽科で捉えた資質・能力を育成することができる。

2 音楽科における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるための学習指導の工夫

これまでの本校音楽科の研究や実践の中で、「社会に変革を起こす子ども」に相当する児童は、「新たな曲から聴き取ったり感じ取ったりしたこと」「友達の音楽表現や音や音楽の聴き方」「これまでに学習した音楽を形づくっている要素や音楽表現の仕方、音や音楽の聴き方」「他教科等の学習経験」「音楽集会や学習発表会での音楽活動」「学校外での音楽に触れる経験」などの情報活用に長けていた。これらの情報を活用することで、新たな曲でも、音や音楽から曲想を想像豊かに感じ取ったり、根拠をもって音楽表現の工夫を考えたりすることができていた。そして、その聴き取ったことと感じ取ったことを、友達に伝えながら思いや意図に合った音楽表現の工夫を考えたり、曲を味わいながら聴いたりすることができていた。一方で、次のような姿も見られた。

- ・自他の音楽表現が思いや意図に合っていることを判断することができない姿【情報の吟味】
- ・イメージを広げたり複数の音楽を形づくっている要素を聴き取ったりすることができない姿【情報の収集】

音楽科の学習の中で「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるようにするためには、自他の音楽表現が思いや意図に合っていることを判断したり、様々なイメージや聴き取った複数の音楽を形づくっている要素に気付けるようにしたりすることが大切である。そこで、以下の学習指導の工夫を行うこととした。

音楽表現の工夫を記録した動画・音声や楽譜を共有する際の視点の設定

音楽科表現領域において、「自らのイメージや音楽表現を基に、音や音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを伝え、他者の音楽表現の工夫を高められる子ども」の姿が現れるためには、自らの目指す音楽表現の達成度を判断することが大切である。曲想から感じ取った曲のイメージと聴き取った音楽を形づくっている要素を合わせたものが、目指す音楽表現となる。目指す音楽表現の達成度を判断できるように、音楽表現の工夫を記録した楽譜や動画を見る際の視点を設定する。

視点は、教師が題材構想の際に決定した「よりどころとなる音楽を形づくっている要素」や児童が感じ取ると想定した「曲のイメージ」に照らして設定する。

		視点例
音楽を形づくっている要素	音色，強弱，旋律，速さ 反復，呼びかけとこたえ 変化など	・工夫した音色が曲のイメージに合っているか ・音色を生かした音楽がつくれているか (波線部には，左記の言葉が入る。以下同様。)
	拍，リズムなど	・それぞれの楽器の拍を合わせて演奏できたか
	音の重なり，和音の響き， 音階，調など	・曲のイメージに合う和音の響きになっているか。 ・和音の響きに合った音で音楽をつくれているか。
曲のイメージ		・音楽表現の工夫が曲のイメージにつながっていたか

以上は，課題を追求する際にICT機器を用いて「イメージや音楽表現の工夫を記した楽譜」を共有する際や「音楽表現の工夫をしている動画・音声」を振り返ったりする際の視点として，活動と関連付けながら用いる。また，教材によっては複数の音楽を形づくっている要素が用いられている場合もある。その場合には，課題追求の過程や児童の実態に合わせて，視点を適宜入れ替えたり組み合わせたりしていく。

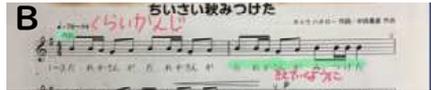
「イメージや音楽表現の工夫を記した楽譜」は，複数の児童の音楽表現の工夫を見比べ，音楽表現に生かしていく過程で活用する。ICT機器を用いて複数人の楽譜を共有することで，自他の音楽表現を比較したり，共通点や相違点を見付けたりできる。そこに，視点を提示することで，目指す音楽表現に合った音楽表現の工夫についての達成度を判断できる。また，その判断に関わる思いや意図を伝え合うことで，音楽表現の工夫を高めることにつながる。複数の児童の音楽表現の工夫を見比べる，具体的な方法は以下のとおりである。



<楽譜の共有画面>



A



B

A ささやくように始め，だんだん大きくしていくように歌う。
 B くらい感じで始めて，きえていくように歌う。
 →視点「クラスの歌い出しのイメージ（秋を見付けてうらやましい）に合う，声の音色の工夫は」を基に，音楽表現の工夫を見比べ，目指す音楽表現に合う，音楽表現の工夫を判断する。

「音楽表現の工夫をしている動画・音声」は，音楽表現の工夫を振り返る際に活用する。動画はグループでの追求の際，姿勢・奏法などを焦点化して振り返るために有効である。また，音声は全体での追求の際，音楽全体を捉えたり過去の表現と比較したりするために有効である。いずれも視点を基に，動画や音声を見る（聴く）ことで自分の演奏を客観的に捉え，目指す音楽表現の達成度について判断できる。

第3学年「いろいろな音のひびきを感じ取ろう」 教材：パフ

イメージに合わせてきれいに音を合わせて演奏する方法を動画を基に伝え合う際の、視点「曲のイメージに合う音の重なりになっているか」の設定

学級のイメージ…パフとジャッキーがなかよく遊んでいる様子

仲よく遊んでいない気がする。
音がずれているからかな。

(演奏を試した後) 2分音符に
気を付けて演奏したら、音がきれいに重なった気がするよ。



叩くのが速いからずれてしまっているのではないかな。2分音符をもっとしっかりのばすといいと思うよ。

鉄琴で演奏してみることと、撮影して動画を振り返ることを繰り返しながら、「イメージに合う音の重なりになっているか」判断した後、「音をきれいに合わせる方法」について話し合い、「正しい長さで演奏する」とよいことや「友達の音を聴く」とよいこと等に気付いていった。

曲想に結び付く聴き取ったことや感じ取ったことを共有する機会の設定

音楽科鑑賞領域において「自らのイメージを基に、音や音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを伝え、他者の曲全体の聴き方を深められる子ども」の姿が現れるためには、複数の曲想に結び付く音楽を形づくっている要素に気付くことが欠かせない。そこで、曲想に結び付くイメージや音楽を形づくっている要素をタブレットで共有する機会を設定する。タブレットやモニターで共有することで、自他の気付きを基に、それらの働きを確認しながら音楽を鑑賞できる。友達の聴き取ったことと感じ取ったことを基に、再度鑑賞することは曲から新たな想像を広げたり、新たな観点で聴いたりすることにつながる。

教材曲や学年の発達段階により、イメージと音楽を形づくっている要素をそれぞれ共有する場合と、組合わせて共有する場合がある。手順は以下のとおりである。

共有するもの	手順	よさ
イメージ	<ol style="list-style-type: none"> ①思い浮かべたイメージを絵や文字で表現する。 ②絵や文字をタブレットで共有し、イメージを思い浮かべた理由を伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年や新たに出会う音楽を形づくっている要素が使われている曲で有効。 ・理由を伝え合う中から、教師が音楽を形づくっている要素を取り上げることで、新たな音楽を形づくっている要素に気付くことができる。
音楽を形づくっている要素	<ol style="list-style-type: none"> ①聴き取った音楽を形づくっている要素を、学習プリントや楽譜に記述する。 ②音楽を形づくっている要素を共有し、聴き取った理由や気付いたことを伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の音楽を形づくっている要素を学習した学年や、音楽を形づくっている要素を聴き取りやすい曲で有効。 ・聴き取った音楽を形づくっている要素を曲想と結び付けて伝え合うことで、新たな音楽を形づくっている要素やその働きに気付くことができる。

鑑賞の際には簡易楽譜や総譜などの楽譜を基本とし、学年や曲に応じて絵や写真などを用意する。旋律や音楽の縦と横との関係等の音楽を形づくっている要素を聴き取る際に補助的に用いる。

複数のイメージや音楽を形づくっている要素を共有した後は、曲を再度聴くことが大切である。自分なりのよさを学習プリント等にまとめる時間を必ず設定することで、自分なりに曲の聴き方を深めることで、その変容に自分で気付ける。

第6学年「日本と世界の音楽に親しもう」 教材：『越天楽』

曲のイメージと音楽を形づくっている要素を共有する機会の設定

イメージ 神社
理由 音がのびては神社 ほいから

(初発の感想)

A:音がのびていて神社っぽい感じがするよ。

<同じイメージをもつ児童同士で考えを伝え合う(赤字)>

B:笛の音が、神社で聴いたことがある気がするよ。

A:たしかに、笛の音があるから、神社の感じがするのかな。

<違うイメージをもつ児童同士で考えを伝え合う(青字)>

C:拍が変な感じ。拍通りだったり伸びたりしている感じがしない？

いろいろな音が重なっているのも神秘的でいいよね。

A:たしかに、拍が伸びている感じが、いろいろな音が重なる感じがするから、神社っ

ぽいって感じたのかもかもしれないな。もう一度聴いてみたいな。

イメージ 神社
理由 拍が伸びたり縮んだりしている感じが、神社の感じがするのかな。

まとめ
越天楽、今様・・・拍がなく、ゆったりしている神社で流れているような曲。
楽器も和太鼓、リュウテキなど日本のもの。楽器ごとに役割が分かっている。
映像を見ると神社で着ているような和装をしていた。



イメージと理由の共有画面

3 成果と課題

本校音楽科では、「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるよう、その授業における具体的な姿や学習指導の工夫について研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

<表現領域>

○成果

思いや意図に合った音楽表現の工夫に対する課題の解決に向けて、自他の楽譜に示した音楽表現の工夫を共有したり、動画や音声を振り返り自らの音楽表現のよいところやできていないところを自覚したりした。その中で、自他の表現から、目指す音楽表現の達成度を判断し、感じ取ったことや聴き取ったことを伝えていた。そして、伝えられた友達は目指す音楽表現を達成するためのヒントを得て、思いや意図を膨らませ、自他の音楽表現を高めていた。

これらの姿は、音楽科では「自らのイメージや音楽表現を基に、音や音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを伝え、他者の音楽表現の工夫を高められる子ども」の姿である。これは、姿が現れるための学習指導の工夫により、自らの音楽表現が思いや意図に合っていることを判断することができたためである。

○課題

拍を示す動画や奏法の動画等を活用して、自主的に表現の工夫を考えようとする姿も見られた。一方で、録音・録画には環境的な制約も大きく、グループごとに追求する学習の際には、音が混ざってしまい、ICT機器を効果的に使用できない場合もあった。今後、ICT機器を用いる際の環境構成や、活用のタイミングや方法を児童自らが選んで音楽表現に生かせるような学習指導の工夫について考えていきたい。

<鑑賞領域>

○成果

曲想と音楽の構造との関わりに対する課題の解決に向けて、曲想に結び付く、自他の聴き取ったことや感じ取ったことを共有する際に、曲から聴き取った音楽を形づくっている要素や感じ取った曲のイメージを伝えていた。そして、それらを伝えられた友達は、曲を聴く際の新たな観点到に気づき、その観点を基に繰り返し聴きながら、自分の曲の聴き方を深めていた。これらの姿は、音楽科では「自らのイメージを基に、音や音楽から聴き取ったことと感じ取ったことを伝え、他者の曲全体の聴き方を深められる子ども」の姿である。これは、姿が現れるための学習指導の工夫により、イメージを広げて複数の音楽を形づくっている要素を聴き取ったりすることができたためであるといえる。

○課題

日常的に触れる機会の多い西洋の音楽を鑑賞する際には、複数の聴き取ったことや感じ取ったことを伝えることができていた。一方で、触れる機会の少ない日本や世界の伝統的な音楽を鑑賞する際には、特徴的な拍感やリズムの高低等をつかみきれず、音楽を形づくっている要素を聴き取れない児童もいた。今後は様々な曲で、よさを十分に味わいながら聴いたり、題材間のつながりを生かして聴いたりすることのできる学習指導の工夫を考えていきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』，平成30年2月，東洋館出版。
- ・深見友紀子・小梨貴弘【著】『音楽科教育とICT』，音楽之友社，2019年。
- ・中島寿【著】『中島先生の鑑賞授業の教材研究メモ』，音楽之友社，2020年。